いしずえ　第５２７号　　２００９年１１月号

「教会の心臓」

助任司祭　　林　正人

私は従姉にシスターがおり、そのシスターに導かれて、小学３年生の時、教会学校に通い始めました。その教会学校は小教区教会ではなく女子修道会の修道院で行われていて、初めに私を迎え入れてくれたのはシスターでした。その後、私が「司祭になりたい」と最初に相談を持ち掛けたのも、実はシスターでした。つまり教会の門を叩いて以来、私にとって一番身近な存在はシスターであったわけで、正直一番影響を受けたのも、これまたシスター、更に言えば祈るシスター方の姿だったのです。時々、先輩の神父様方に、「お前は神父ではなく、シスターに育てられたからな」と、冗談交りに言われることがありますが、それは真実だと思います。その意味では、私は少々〝特殊な〟導きによって司祭召命を受けたと言えるかもしれません。

叙階の恵みを頂いて、小教区で働き出してからも、時々疲れを感じると修道院に押し掛け、シスター方と共にミサを捧げ、食事を頂きながらの会話を楽しみました。これは申し訳ありませんが、信徒の方々には味わうことのできない、言わば司祭特権ですね。そこが初めて伺う場所でも、不思議にシスター方の家は、私には実家のように落ち着くのです。ありがたいことです。

さて、教会におけるシスター（ブラザーもそうですが）の役割は様々です。会の性格、霊性によっても違いがあるでしょうが、究極的には、その役割、使命は〝祈り〟に集約されると思います。カルメル会の聖人、小さき花のテレジアは、その自叙伝の中で自らを〝教会の心臓〟と表現しています。つまりシスターとは、外で働き、疲れた信者の血を、静脈から受け止め、祈りによって活性化し、動脈から信者に送り返す、正に〝心臓〟の働きを担っており、教会になくてはならない存在、これなくしては機能不全に陥る、という存在なのです。

教会ではよく〝司祭召命〟のために祈ります。勿論重要なことですが、同時に、ブラザーも含めた修道者の召命のためにも、私たちは大いに祈らなければなりません。そして多くの若者、特に女性が、〝教会の心臓〟の役割を担って下さることを切に願っています。